シンシナティの坂道を歩く

大鳥 由香子

坂のある街で生まれ育ったからだろうか、旅先でも坂道を好んで散策しているような気がする。留学先であったアメリカ東部マサチューセッツ州ケンブリッジは起伏の少ない街だったが、ボストンの観光名所でもあるビーコン・ヒルの石畳の坂道を歩いたのは快い夏の思い出である。アメリカで最も有名な坂道といえば、サンフランシスコのランバート・ストリートだろう。こちらはビーコン・ヒル以上に「映える」場所だから、映画やドラマでもよくお目にかかる。

プレーリーの大草原と農業地帯の広がるアメリカ中西部にあって、オハイオ州シンシナティは坂の街である。ミシシッピ川の支流であるオハイオ川の渓谷地帯、アパラチア山脈の西端に位置し、一九世紀前半に水運の要衝として急速な発展を遂げた都市である。その市街は当初川沿いの低地に造られたが、人口の増加とともに「七つの丘」へと広がっていった。シンシナティはまた、アメリカ中西部で最も早くユダヤ人のコミュニティが創られたことでも知られ、私が同地を訪れた目的もアメリカ・ユダヤ史料館での調査だった。史料調査の時は、朝から晩まで文書に埋もれて過ごすのが常だが、この時は平日の昼間に街を散策する機会があった。私以外にも数名の研究者が訪れていたので、史料館の職員が旧市街のシナゴーグ（ユダヤ教の礼拝所）とユダヤ人墓地を案内してくれたのである。一九世紀半ばに建てられたシナゴーグの内部は荘厳で、往時の街の活力が眠っているようだった。というのも、シナゴーグ周辺の街路に漂う哀愁は、寂れゆく街の苦難を伝えて余りあるものだったからである。

アメリカの製造業の衰退とともに人口の減少したシンシナティでは、ラストベルトの苦境とアパラチア山脈地帯の貧困がまじりあう。宿泊先と史料館の行き来も含め、街中を歩くと急勾配の坂道の連続だったが、シンシナティ大学の周辺を過ぎると、夕暮れ時にあかりの灯されている建物といえば病院くらいのものだった。治安が悪いとまではいわないが、暗くなると徒歩での移動は憚られるような雰囲気があった。

そんなシンシナティの坂道を歩くと、今この地に暮らしている人々の憂いだけでなく、かつてこの地を通り過ぎた人々の哀しみが足元に刻まれているようでもあった。一九世紀半ばのシンシナティは、奴隷の逃亡を支援する地下鉄道の重要な中継点であった。南部ケンタッキー州に隣接し、一八五〇年には全米第六位の人口規模を誇った都市は、奴隷州と自由州の境界線上にあった。一体、何人の逃亡奴隷がこの街を通り抜け、五大湖沿岸の平原地帯、そしてカナダへと向かったのだろう。そして、彼らはどんな表情を浮かべて、坂道を進んだのだろう。私はシンシナティを訪れる前、逃亡奴隷といえば昼間の地下室や幌馬車の中で息を潜める姿か、夜闇の草原を走る姿を思い描いてばかりいた。少なくとも逃亡奴隷を扱った作品を読んだときに、坂道を逃げる奴隷の姿を思い浮かべた記憶はない。

現在はインターネットを通じて、世界のさまざまな場所を目にすることができる。それでも、坂道を歩くときの視点の変化をスクリーン越しに体感することはできない。ある土地の醸し出す歴史の匂い、ある場所に特有の身体感覚は、実際にそこを訪れて初めて知ることのできるものであろう。そして私たちの描く歴史像は、そんなささやかな発見からも少しずつ変化していく。コロナ禍が落ち着き、アメリカにもう少し気軽に渡航できるようになったら、シンシナティはまた訪れたい街の一つである。それがいつになるのかはわからないが、もう一度あの坂道を歩くのを楽しみにしている。

おおとり・ゆかこ　世界言語社会教育センター講師。専門はヨーロッパ史・アメリカ史。主要業績に"Disposable Subject: Law and Child Migration to the United States, 1890s-1920s" (Harvard University PhD. Diss., 2021)。論文に「ウィルソン、ウィルソン主義と米ビザ制度」『国際政治』一九八号（二〇二〇年）、「産声を記録せよ――アメリカ合衆国における出生登録制度」『アメリカ研究』五三号（二〇一九年）がある。